



## ◇大会総括

### 1 公式練習における調整

大会前の公式練習は、11日のフリー練習、12日及び13日のグループ練習が与えられた。グループ練習においては、ウォームアップ会場40分、試合会場40分、トレーニング会場40分の3回/日があったものの、同じグループにいたポルトガルの参加選手が多いため、20人以上が並んで順番を待っていたため、集中力を維持することが難しかった。

公式練習でまず、行ったことはベッドの弾みに慣れることからだった。大会の台は日本で練習している台と同じユーロ社製であったが、ベッドが新規規格の幅6mm×6mmのベッドであり、日本で普及している13mm×13mmのベッドよりも柔らかくて跳ね返りが遅く、それでいて弾性が高いため、高さが出過ぎて最初は着地が取れなかったのである。2日目からはベッドの弾みにも慣れ、このベッドに慣れると高さが出るので技をかけやすく、着地までの滞空時間が長いので、選手たちは気持ちに余裕が出てきたようである。

大会会場での公式練習は40分×2日しかなかったので、2日目は、試合を想定してウォームアップ会場の40分間の練習を試合前のアップに充て、大会会場に移動して2本アップしてすぐ通しをさせてみた。ウォームアップ会場の台と大会会場の台も微妙に弾み方が違うのか、この時の通しは、3人とも満足のいく演技ができなかった。このため、本番では、直前の2本アップを台に慣れさせるために跳ばせる方針に切り替えることとした。

### 2 試合

#### (1) 11/14 鈴木 楓の試合

試合が始まると、ウォームアップ会場はグループ練習を排除し、予選に出場する選手だけのために開放された。このため、アップは試合時間に合わせて体を作ることができた。楓の演技はWAGの試合で日本人女子選手として初めて2回宙返りの連続に挑む。試合会場の2本アップでは、1種目めでスポッターマットを入れ、技の入りの感覚を掴ませることに専念した。試合では、これまでの練習では見たことがない高さで見事2本とも通すことができた。が、結果は25位。しかし、ベストの演技ができた。

#### (2) 11/16 斎藤慎悟の試合

慎悟は、ウォームアップ会場に入る前のストレッチをしているときに、唇が渇き、顔が硬直するくらい緊張していた。しかし、ウォームアップ会場でダブルミニを跳び始めると「試合筋」が出て、スピードに乗った助走から高さのあるジャンプを連発していた。「調子がいいぞ!」と、声をかけると、緊張が和らぎ、気持ちが乗ってきた。練習を早めに切り上げ、体力を温存。試合会場での2本アップでは、本番と同じ演技をやらせて着地までの感覚を掴み、本番でも、スピードに乗った助走から高さのある2本の跳躍、そして1歩も動かない着地。この大舞台上で、これまでの練習でやったことのないベストの演技を披露し、順位は15位。

### (3) 11/16 舟越晴香の試合

晴香は、1パス目のタックバラニーからダブルバックの着地に不安があったので、ウォームアップ会場では先に2パス目の練習を行い、1パス目を後に練習してその感覚を残したまま試合会場へと移動した。前のグループの試合時間が延びて入場口で余計に待たされた。体が冷えないようにジャージを着て備え、予定よりも10分程度遅れて入場した。晴香はウォームアップ会場でも大会会場でも冷静だった。2本アップでは、1パス目のダブルバックまで技をかけさせて着地の感覚を掴んだようには思えた。しかし、本番では、1パス目が入りのタックバラニーのひねりが早く、パッドに落下し中断、0種目となってしまった。2本目は気持ちを切り替え、きれいな高さのある演技で着地までまとめることができた。

### 3 考察

- ・ 今大会では、それぞれが持ち味を出してベストに近い演技をしたにもかかわらず、一人も決勝に進むことができなかった。予選の成績をみると決勝に残ったのは難度が高い選手だけ。ダブルミニは2種目だけなので、着地をある程度まとめれば、演技点ではほとんど差がつかない。最終的には難度点がどれだけ高いかが勝負の分かれ目になる。決勝進出を目指すには、もっと難度を上げなければならない。11～12歳男女でも、最低2種目とも2回宙返りの構成が必要である。
- ・ 今後の課題は「難度をあげること」。しかしながら、ダブルミニは、助走のスピードを活かしベッドを踏み込む角度を調整しながら技をかけていくテクニックも必要であるので、しっかり高さを出して2本続ける反復練習で基礎を固め、新たな技にチャレンジすることでさらなる上を目指したい。



鈴木 楓選手の演技



齋藤慎悟選手の演技



舟越晴香選手の演技